

戦 時 中 の 生 活

戦争と現在の世の中を振り返り見て

吉岡昌子(五)

思い出すだけでも、二度と戦争にはあいたくない。私が、小学校四年生の頃でした。それは忘れもしません。警戒警報で家に帰る途中防空ずきんに、もんぺ姿、私家が一番遠いため、一人になったその時、空襲警報のサイレンがなると同時に、飛行機の爆音が聞こえてきたので、無我夢中で、走って帰る途中、急に飛行機が急降下して来たので、思わず、草むらに身をかくし、息をこらえてじっとしていると、「びゅーん」という音がして、近くの川に爆弾が水しぶきを上げ落ちた。飛行機が遠ざかったので、頭を上げ、一目散に、家に

帰りました。その時、私をねらって爆撃したのでしょいか、けんとうがはずれ、川に落ちたのが、不爆弾であったので、幸いに私は助かりました。その時の一瞬生きたこちは、しませんでした。家に帰えると皆が心配して、木かげから私を見守って、私の顔を見るなり、「ああよかった」その時は、私も声が出ませんでした。

昭和十九年から二十年にかけ、学校の勉強はおろか、開墾又開墾で、くわを持ったことのない私達小学生でしたが、それでも皆力を合わせ、平地ならともかく山を開墾して、さつまいもの苗木植えにお国のために、つくしました。それからというものは、毎日警戒警報、空襲警報の、くりかえしで、学校では、竹やりの訓練、開墾、家に帰えれば、夜は電気もつけられず、防空壕に入り、警戒警報解除になれば防空壕から出、毎日毎日がびくびくした生活でした。一番心配しましたのは、防空壕に入っている時、B29が飛んで来て入口の土が、バラバラと落ちる。そのたびに、生き埋めにならないかとはかり心配する。また夜になると大阪の空

を見上げると真赤になり、時には風の向きで灰が飛んで来たことがあり、夜もいつも防空壕に入られる用意をし、安心して睡眠をとることが出来ませんでした。

それから広島、長崎に原子爆弾が落ち、大勢の方達が犠牲になられ、親子「チリチリ、バラバラ」になり亡くなった人達も数知れないほどで、生き残った人達は、後遺症で苦しんでおられる。また一方では、結婚してまもなく戦争で夫をなくし、女手一つで子供を育て上げられた戦争末亡人の方達は、口に言い表わせないほど、ご苦労があったのだと思えば、胸があつくありません。

戦争が終わってから長い間、たべもの、着るものにも不自由をして来ましたが、今の世の中、特に若い人達は、戦争のつらさを知らないで、自由自在に暮らしていますが、いつまでこれが続くか、あまりにも人情性がないように思われる。「戦いはまず敵を知る」とよく言われる。太平洋戦争において、わが国が負けたのも米国の力をよく認識していなかった。しかし、敵

を知る前にそれはまず「己を知る」と言うことが大切だと思う。「己」をかえり見て、己を知る「何事にせよ己を知る心がけを如何なる場合も、失いたくないものである。」

「人生とは一日一日が、死への旅路であるとも言えよう。互いに「生」あるものは「死」にあたえられたこのきびしい宿命を直視し、これに対する道を厳粛に、しかも楽しみつつ考えたいものである。私の言いたいとすることは、すぎ去った日は、もう二度とかえって来ない、お互い自分達の力で明るいわが国、世界の平和と繁栄の道を今こそ真剣に考え、世の中をじっくりと味わい、毎日を感謝の気持ちで暮らして行きたいものです。もうあのような戦争は二度とないように、皆んなが力を合わせて、平和に幸せな暮らしを営むためには、国の政治（経済、文化、教育、福祉、自然保護）を正しく世界の繁栄と、平和と、幸福を共に築き上げて行きたいものである。」

（松井在住）

沖繩の空に

古川 章（五）

△なつかしさに天を仰いで呼びたく、さびしさに地に伏して泣きたい▽と亡父への思慕をこのように表現した作家があった。これはまたほくにも言えることである。

「なつかしき」あるいは「さびしき」は、ぼくが「父」ということばを口にするとき、ほのかに淡く感じるだけにすぎず、それは現実の想い出をもたないものなのだ。それはあこがれ、またセンチメンタルなイメージにつながる。

この「父」へのなつかしきとさびしきは、昭和二十

年六月に父が沖繩で戦死したことにはじまる。

当時、国民学校の二年生だったぼくにとって、はっきりした父との記憶をもたない。一つの対話さえも無いのだ。ただ多くの兵士たちの乗っている駅頭の列車に向かって目の丸の小旗をふっていたぼくと、父であろうと思う人の長身の軍服姿がまぼろしとなっている別れのシーンしかもない。そのまぼろしはいつも美しい。年を経ることに美化され、一幅の絵を見るようなイメージとなってぼくの内深く棲んでいるのだ。

昭和二十五年四月、中学三年になったぼくは父の死をたしかめるべく、沖繩護国寺の住職、名幸芳章氏に手紙を書いた。それは「戦死した父恋う少年の手紙」として琉球新報に報じられた。

それからしばらくして川崎信志という方から手紙をもらった。それはぼくの手紙を読んだ沖繩の住民の中に父を知っている人がいるという知らせだった。ぼくはその日の驚きを忘れることはできない。手紙はつぎのように書いてあった。長いが引用することとする。

父の遺品

「あなたが名幸師に送られた、切々胸をつく父を思うお手紙拝見しました。私も名幸師と共に沖繩戦線に散華された日本軍将兵のご遺骨の収集に協力しております一人です。あなたのお手紙を拝見してすぐ当時の新聞社にそのことを出してもらいました。早速詳しい父上のご様子がわかりましたので、名幸師にかわりお知らせいたします。

お父上の部隊は那覇市の北方に陳地をもつ一部隊でした。お父上の部下の一人で生存者であり、お父上の英霊及び遺品を最後まで持っていた「長嶺栄吉」さんから聞きした話です。

お父上の部隊は、お父上を隊長として七百八十三名（その内生存者三名）であつたとの事。長嶺さんが隊長の命を受けて後方に弾薬を取りに行つて、わずか二キロぐらいの所ですが、猛砲撃の中を七、八時間もかかつて部隊に帰りついて見ると全員戦死しておられたのです。古川隊長も重傷を（右胸部）のために倒れて

それだけ書かれてから、ご自分の髪と爪を切つてくれといわれたので涙を吞んで髪と爪を切り終わると、長嶺さん他二名の兵に早く後方へさがれと手を振られていたが、長嶺さんが再び抱き起こす時に、がつくりと前にのめられて帰らない英霊となられたのです。長嶺さんはその遺髪、爪、遺言書、日本刀を持って戦火に追われて島尻へ南へ南へとさがつて行かれたのですが、その間約一カ月も持っていたのですが、最後にはどうしても持つていくことが出来ず、喜屋武部落の片ほとりに埋めて、六月二十三、四日頃、米軍の捕虜となつてハワイまでつれて行かれて二年目に沖繩へ帰還されました。現在の長嶺さんは元気で大工さんをやっておられるのですが、この話をしながら「古川隊長は本当にいい人でした。部下思いでした」と幾度も幾度も言われていました。

その遺品を埋めたところもほぼわかつてるので、近日、長嶺さんに案内してもらつて私達は発掘に行こうと思っています。

おられたので、長嶺さんが抱き起こして、「隊長殿、しっかりして下さい。長嶺であります」というと苦しい息の下から「東へ向けてくれ」といわれたのです。しかしこれはことばが出ず、ただ手を振り動作だけでしたが、長嶺さんの懸命な気持と古川隊長の気持とが以心伝心というのでしょうか、長嶺さんにはそうとわかつたので、身体を東へお向けすると静かに敬礼をされてから「紙はないか」これも作動のみ。「なにもありません」と答えると、ご自分のポケットの裏の布が白いの、その白布を取られて、かたわらのすすきの茎を取られ、口で細かくさいて筆のようにされ、胸から吹き出る血潮をそのすすきの茎につけて、遺言をかかれました。それも手がきかず、口にくわえて書かれたのです。その書かれた文字を今でもはつきりおぼえています。

「お父さんはこの沖繩で死ぬ。この日本刀はお父さんのかたみと思つてくれ」これはきつと章君にあてたものでしょう。

「おそらく七年間も土の中にあるのですから、残つていくかどうか心配ですが、せめて日本刀でも発見したら、すぐ送りいたしましょう」との長嶺さんのお話から察して、戦死されたのは、那覇市北方の松川の缶詰工場附近で、一九四五年五月二十一、二日頃と存じます。何と偶然か、この手紙を書いている月日と七年間の違いはありますが同じではありませんか。長嶺さんはいもつと早く発掘して御送りしたいと言われていたが、ご遺族のおところがわからず、今日まで出来なかつたのです。

章君

お父上は部下にしたわれた、最も日本軍人として、めずらしい人間味のあふれた方であつたとのこと、そのお父上の地上に残された唯一のものは章君でありましょう。

君の胸中を推察する時、私達は何も申し上げる言葉もありません。が、次代の日本を形造る君達若人は、戦争の悲劇を身をもって体験された貴い人間として、

将来は世界平和のために、そして南海の果てに散華されたお父上の霊をお慰め出来得る世界人となれんことを祈りつつ、お知らせのペンを置きます。」

行きて浄めむ

こうしてつかみ得た父の死の最後に、ほくたち家族は新たな哀しみをもった。このことは、「公報という一片の紙片が果たして真実であるか、たしかめるために」。沖縄の遺骨の上に咲いた野菊にも似て、可れんな一つのエピソードである」と当時、新聞が書いてくれた。

中学から高校を終えたぼくは、立命館大学の日本文学科に入った。昭和三十二年であった。そしてぼくは、学園の先輩、平見昌巳という人が、沖縄郵便友の会の招きで渡島することを知った。いつかぼくにも沖縄へ渡る機会があらう。その日、父のまほろしを思いうかべ沖縄の野をさまよう自分の姿を想像した。

ぼくは自分のその気持を平見君に托した。それは、自分のつたない歌「みんなみの沖縄島にいつかわれ行

きて浄めむ父のおくつき」と、父にとってなつかしい郷土の石であった。平見君はこころよく引き受けてくれた。

沖縄についた平見君は、多忙な用務をさいて名幸住職や父の最後を知っていた長嶺氏に会い、話をきいてくれた。父の戦死した日は六月二十四日よりもう少し早く、また父は「石嶺」という激戦地で死んだという。そのことは大阪出身の小川という方も父の最後を知っておられたことであつた。

そして平見君は郵便友の会、沖縄教職員会の人たちの案内で、それらの地を歩き、具志頭村の大屯という小丘に六尺近い墓標を建ててくれた。おもては、故陸軍少佐古川長彦戦死の地、裏側には、建立願主遺児古川章、施主平見昌巳、沖縄教職員と書かれている。

その墓標の下に、ぼくの歌とふるさとの小石を埋めていただいたのである。

沖縄にはいまもお、身元もわからぬ多くの戦士たちがあるときく。父は幸せなほうである。これも平見

君の友情と、多くの沖縄の人たちのあたたかい思いやりをいただいたためである。

父をしのぶとき、これらの人たちがなつかしく思い出される。みなさん、本当にありがとう。(二十六歳当時の手記「いしずえ」日本遺族会編刊行より)

(草内在住)



激戦地であつた沖縄。ここで多数の人が犠牲となつた。

一戦争未亡人の記

辻 尾 逸 子 (七九)

田辺町では平和展が催され、街には物資があふれ豊かな生活が出来る今日、五十余年前の戦争で明けくた乏しかった過去を振り返り今更悲しかった日々が思い出されます。終戦から四十六年経った今も戦死の主人が何処かに生きていられるのではないかと思う日もあります。穴という穴は火炎放射機で焼かれ生きている人はないと病院船で帰った人から聞きました。間もなく五十四回忌がまいります。子供達と共に無事お勤めをしたいと思う昨今です。戦争の体験者として戦時中の苦しさを知って頂きたいと思い書きました。

で、畑でさつま芋、麦といろいろ作りました。配給品は麓の米屋さんまでぬかの入った土色のうどんなのこまぎれや大豆の油の絞りかすを貰いにリヤカーを引張って行きました。ごはんにまぜて炊くのです。一枚の布も「衣料切符」で買い、何もかも自給自足で作らねばならなくなつたのです。醤油造りも教えて貰い炭焼もしました。炭焼は火の加減を見に夜中に出かけねばならず、冬はとてもつらい仕事でした。

敵のB29艦載機等、度たび上空を飛来しました。はげしくなるにつれ、田んぼも作ることにきめ小作から少しづつ返して貰い、近所のおじさんに、水田のすきかけをたのみ作りました。粃を干す庭がないので、座敷を使い、廊下には藁をならべ粃を干しました。またさつま芋の苗床を作るために近所から牛糞を貰い青草とまぜ、いきりを出すことも教わりました。町の命令で御先祖様が大切にしていた牡丹園の数千本の木すべて引抜き野菜畑に変えました。小さい子供まで、畑仕事を手伝せ生活してまいりました。田舎だから何か食

思いかえせば昭和十五年私二十八歳の五月主人は応召で出征、中支にまいりました。老父母と三人の子供お腹に一人と私の七人の家族を残しての出陣でした。赤紙一枚でさぞ出にくかったつらかったであろう、心の内がしのばれます。

千人針作り、出征兵士の見送り、慰問袋作りといういろいろのことがあり、やっと終戦を迎え、うれしやと思つたのもつかの間、戦死の公報、中支に三年転戦やつと帰還が叶い帰途についた船をインド・ビルマ国境の敗戦に勝利の部隊としてまわされ、世にいうインパール作戦に参加、一年余も前に彼の地の露と化していられたとは。

印度国アッサム州カングラトングイ東方四軒エクバンが公報の戦死場所でした。二十九歳で出征、昭和十九年五月十八日死亡、三十三歳の若さでした。遺児である息子は父親の年令をはるかに越し、役所に勤務定年を迎えるまでになりました。食糧の不足は田舎も百姓をしてなかつたため、毎日の食糧事情はひどいもの

べる物があるからよいものの街では食堂の前に行列、それも水が多く箸の立たない雑炊が売られ、それも全部に行き渡らず、あぶれる人も沢山とか、餓死する人もあつたと聞きました。今から思えばうそのようです。戦争中白無垢姿で、戦死の主人の後を追って自刃する妻の記事が報道されていました。私には四人の子供がいる。この子等を残して死ぬことは出来ぬと心に強く言い聞かせて生きてまいりました。生きる欲びこんなよい時代が来ようとは、国のために死んで行かれた沢山の人々が哀れです。この頃のように捨てることが当り前のことには耐えられません。ちょうどこれをしたためている時、ラジオのリクエスト曲、ガード下の靴磨きの歌が流れて来ました。昭和三十年代になつても末だ戦災孤児がお金をかせぐ時代であつたのかと万感胸にせまりました。戦死地を一度はたずねたいと思つた日もありましたが、娘婿がエクバンをたずね幾枚かの写真と石を持帰ってくれました。仏壇にまつり、毎日お参りすることに老いの身を安んじております。

最後に亡き主人に十一人の孫の顔を見せたかったと思います。

追伸

一家で食べるために作ったさつま芋まで供出させられたこと

金物は火鉢から仏壇の花筒まで

雨樋は全部竹に変えさせられたことも書きたかった

(天王在住)

戦時下の生活

木元アイ(六九)

四十数年の平和にとっぷりつかって戦争のあの頃を忘れがちになっていた私達、今一度追憶の糸をたぐって見たいと思います。昭和十二年に小学校を卒業した年に、支那事変が勃発しました。新聞紙上では連戦、連勝、我が軍は天をつく勢いで報道されましたが、我方の損害は伝えられなかった。戦線は中国全域に広が、り村中の働き盛りの男の方達は赤紙一片の召集令状で、老父母を残し最愛の妻子に万感の想いを振り切つて勇躍戦地に赴かれた。

昭和十六年には大東亜戦争の火蓋は切られ、米英の

ちにはソ連等大国を相手に戦うことになりました。当時軍部の圧力は大了なもので、言論の自由は封鎖され(特高警察)世界の動向に通じておられる愛国の士は次々と投獄されました。刻々と戦況は悪化の一途を辿り、末端の農家でも手作業ばかりで作った米は厳しい割当てのもとに供出したものでした。戦争に勝つためにはどんな辛棒もせねばなりませんでした。半麦ご飯、お粥おじや団子等随分貧しい食生活でした。食糧不足は深刻で都会では、主食に大豆や甘藷が配給されたと聞きます。田舎に親戚のある方々は大きなリュックを背負って食糧の調達に帰ってこられた。乏しきをつかち合つての苦しい生活、それに空襲に備えて都市よりの疎開者を受け入れて、家も納屋も俄か作りの炊事場をこしらえ、雨露を凌ぐだけの貧しいどん底生活をされました。都市の学童も親の許を離れての集団疎開が、方々で行われた。我が家でも都会に住む親類の子供を父の戦死と共に引き取り、姉弟のように長いこと暮しました。私達女子青年団員は、毎月公民館に集り村出

身の兵隊さん方に慰問の手紙を書いたり留守宅の老両親や幼な児を抱えられた若い奥さん方を助けて田の草取り等、炎天下十数人の団員は力を合せてお手助け勤労奉仕をしました。また縫物奉仕や甘藷畑の共同栽培などいろいろやりました。「ほしがりません勝つまでは」の標語は至る所に貼られ、若い女性憧れの着物も長い袂をぶつ切り切って元禄袖にし、母の着物でモンペや上衣を作り、外出着にし白い綿布を染めて足袋を作り、皆不平も不満も言わず、勝つまではの辛棒と純情な大和撫子でした。金具類も軍需用に回収され、床の置物、佛具、鉄徳の火鉢等大切な家宝の品々も国の為に出さねばなりません。国の政策に縛られた生活に耐えて行かねばなりませんでした。戦局は我に利なしの一端を辿り、我が村にも続々と戦死者の公報は入り、我が子、我が父、我が夫をそして婚約者も帰らぬ人となり、心のそして生活の支えを失って悲嘆のどん底に陥ちいた方々、どんなに大勢おられることか。

昭和十九年には本土空襲も熾烈になり、大都市や軍

事施設は次々と爆破して行きました。大阪空襲の夜など、西の空は真赤になり、真黒な灰はここ田辺の方にもにも飛んできました。家を焼かれ、親子夫婦ばらばらになり、戦災孤児や浮浪者は巷に溢れ、悲惨なこの世の地獄絵は至る所で展開致しました。田舎でも「燈火管制」は厳しく防空頭巾を枕許にモンペをはいて寝たものです。家に一つか二つしかない電燈に覆いをかけて暗くし家族皆寄り集まり子供は勉強を女は縫い物やわら仕事など夜なべに精を出し、今思うと温かい家族のぬくもりがしみじみ懐かしく思います。

昭和二十年八月十五日正午、天皇陛下のポツダム宣言受諾の玉音放送を涙と共に聞いた。その日以来怪鳥のようなB29の来襲は無く夜も明るい電燈はともり、「ああこれから敗戦の憂き目にいろいろ会はねばならないだろうけど戦中のことを思えばどんなことにも耐えて行けるわ」と思ったものでした。その昔、日露戦争の折に「子等は皆戦の庭に出て果て、翁や一人山田守るらん」と明治天皇は詠まれました。もう二度とあ

んな戦争多くの人の幸せを一ぺんに潰してしまう戦争はこないよう痛切に思います。「国破れて山河あり」とか土に生きる者の強さ、幸い栄養失調にもならず、私達夫婦は健康な平和な老境を心豊かに感謝の日々を送らせて貰っております。

(宮津在住)



戦争中、男性不足から、女性は国防婦人会などを組織し統後を守った。

赤いはな緒のわらぞうり

岸田 映子(五)

今から四十余年前、私がまだ十歳に満たない少女の頃である。

京都市に住んでいた私は太秦国民学校の生徒であった。若い男教師は戦争にかり出され一クラス百名のマンモス学級となり、年離れた女教師が多かった。その頃の服装は、防空ずきんをかぶり「わらぞうり」を穿いていた。

決戦服にモンペを着用し、運動靴はクラスに八名ずつ配給制で渡され、その順番がまわって来るのが待ち遠しかった。つぎはぎだらけのモンペは常に洗濯し何

処で倒れても分かるように名札を縫いつけてあった。

「わらぞうり」は農家へ友達と買いに行くのである。お年寄りが、わらくずだらけの中でコンコン木槌でわらを打ち、またたく間にぞうりを編んで行く。その手先きを魔法使いのようだと私は思った。

「はな緒のところへ赤い布をいれてほしい。」「わたしも」「わたしも」と口ぐちに注文する。「赤と白を入れて可愛くしておくよ」おばさんは、ほんの少しの布を細く切りさいて、わらに混ぜて編んでくれた。わらくずを燃やし炎でまわりをサツと焼く。わらの匂いが鼻に沁む。そのぞうりをしっかりと抱いて夕焼けの道を走って帰ったものである。

家に帰ると夕飯が待っている。お米など殆んど入っていない「増量ぞうすい」。大根葉が入っていたり、カボチャ、サツマイモ、とにかく手に入った野菜や野草を放り込み、人間の食事とは思えない物を、松葉の枯葉を集めて炊き上げるのである。土間には「すす」が舞う。

電球に黒い布を被い、薄暗い食卓で湯気に包まれて家族全員「ぞうすい」をすするのである。

夕飯が済むと勉強にとりかかる。ザラ紙の教科書を読むのである。小さな字を薄暗い電燈の下で読むのは、つらいことであつた。

「目を悪くするから、早く寝なさい」。勉強のこともりも身体を気づかってくれる母の声にしぶしぶ床に入ったものである。今読んだばかりの本を暗誦しながら眠るのである。

ラジオを聴くこと、本を読むことさえ停電、空襲警報で中断され唯一の楽しみを奪って行く。

栄養失調で死んで行った人もある。「食べる本能」を満たされないあの頃――野に咲く花を食べ、草苗の豆を「おやつ」にしたっけ。

広島や長崎で原爆にあい一瞬にして灰と化した私達同世代の人たちもいる。今思うと、そんな中で「よくぞ生きてこれたものだ」と背すじが、ひやりとする。「京都に住んでいたからこそ助かったんだ」そんな思

いが心を横切る。

終戦の年、米軍飛行機からチューインガムやチョコレートを撒かれ、それが落下するのを追いかけた男の子たち。「毒が入っているよ」と注意され横目で睨んで生つばを飲み込んだあの頃 チューインガムやチョコレートなるものを知った。

四十余年経った今、世には商品が溢れ、物の大切さを知らぬ人々が往来する。「飽食時代」「使い捨て時代」とまで云われている今日、数十万円もするオートバイにスリルを求める未成年者が続出している。その親たちも戦争の悲惨さを知らない世代になっている。物を買い与えることで子供のご機嫌をとる母親教育が益々子供を歪んだ方向へ走らせるのでは?…

戦争は二度と起してはならない。今、生きている人たちが戦争について語り正しい判断と行動をしていかなければ日本は平和だと言いつつ減びて行くような気がしてならない。

街を歩いてふと店先きで「わらぞうり」がぶらさが

っているのを見かけた。「民芸画」と書かれたコーナーには美しい布を入れて編まれている。手に触れて私は過ぎし日を思い、心の芯がチクリと痛んだ。

(田辺在住)

戦争中の思い出

西川 博子(五七)

私が終戦を迎えたのは、国民学校五年生の十歳の時でした。それまでの間にいろいろなことがありました。

ある日先生は、「鍋墨のある人は学校へ持って来て下さい。」と言われ何に使われるのかなあとと思うと、先生はそれを水でこねて校舎の白壁を黒く塗りつぶされるのでした。また、私達の着ている白い服は、家で黄土色に染めて着るようにと言われました。建物も人間も、敵機にねらわれないようにするためだったのです。

勉強はと言えば、避難訓練ばかりでまともに出来ず、防空頭巾と非常カバンは、いつも放すことなく登校し

ました。学校の校庭には、練習機が疎開でいっぱいになり、運動することさえ出来ませんでした。その上食糧不足で、上級生は山を開墾して大豆をまいたり、サツマイモを植えたりしていました。私達は、農繁期になると五、六人に分かれて、兵隊に行かれて、人手のないお家へ、勤労奉仕に行ったりもしました。

食糧品、その他どんな物でも配給制度で、チケットがなければなかなか手に入りませんでした。ご飯は勿論、麦や大根等を混ぜて炊いたものばかり食べていました。

お国のためにと、金属製の物は皆供出させられました。また市内の方は空襲が激しく、親戚の家財道具を疎開で預ったこともあります。兵隊さんが入隊される時など、日の丸の旗を持って見送りに行くのです。我が家でも、兄は伏見の三・八へ入隊し、父は竹槍を持って田辺小学校へ練習に行きました。家に残されたのは年寄りと女子供だけで、とても心細かったのを覚えています。

各自の家には、防空壕が掘ってありました。昼夜を問わず、空襲警報が発令されたと思ったら、敵の飛行機B29が編隊となって頭の上を飛んでいました。また、艦載機と呼ばれるものは、人を見つけると急降下して来て射撃するのです。急いで防空壕に避難すると、中は電気はなく、「トウシミ（お皿に食用油を入れて、細い芯の様なものに火をつけたもの）」をつけて、灯りがもれないようにして、毎晩その中で寝るのです。あの怖かったことは忘れることが出来ません。祖父などは「同じ死ぬなら畳の上で死ぬ。」と言って、防空壕へ入ろうとしました。

終戦直前には、学校へ行くことも出来ず、各部落の公民館で勉強しなくてはならなくなりました。本を読むか、漢字の練習をするのがやっとでした。

大阪の爆撃には、見る見るうちに西の空は真っ赤になり、燃やされた襖が灰になって、そのままの形で飛んで来たのと、はつきりと覚えています。その後の二・三日は何もかも灰で真っ黒でした。

最後には、木津川へB29が火を吹いて落ちて行きました。

幼な心の思い出ではありますが、頭に浮かんだいろいろなことを書かしていただきました。このような体験は、私達だけで充分です。子供や孫には二度と会わせたくありません。今世界のあちこちで起こっている戦争が、一刻も早く終わることを願ってやみません。

(田辺在住)

戦時中の思い出

井上 ミツエ (八三)

昭和十二年（一九三七）七月七日、蘆溝橋事件で日中戦争が始って以来、米が配給制になり、つづいて衣料品も切符制で自由に求められなくなった。食肉・酒・酢・醤油・塩・牛乳・油・砂糖等の日常食料品・石鹼・マッチ・ローソクなど日用品も統制下で、長い行列をせねば購入出来ないものであった。当時私は女学校教員で、しかも幼児の養育中であり、食糧不足のため、栄養失調になってはと官舎の周辺で小麦・大豆・馬鈴薯・南瓜等を作り、小麦粉麵米犬・高野豆腐等に加工して貰い、空腹を満たしていた。

十五年（一九四〇）の前年には八紘一宇の精神で檀原グラウンドの奉仕作業に宿泊して生徒と共に出かけた。十六年（一九四一）十二月八日早朝、ラジオ放送で真珠湾攻撃を聴き興奮した。これから先、どんなになるのかと不安でたまらなかった。我が国は神風が吹けば敗けることは絶対にない。日清・日露の戦争のように必ず勝つと歴史で教っていたので、身を捧げて働くことは当然であると思えた。今まで以上に努力を重ね、早朝より学校へ行くまでと夜の手仕事に専念した。出征兵士の見送り、国防婦人会への協力はいふ迄もなく、教室では慰問袋作り、千人針も刺した。

学校の広い運動場を全職員で開墾し、分担して甘藷を作り帰学の折に持帰り主食の補いにした。英語の授業は敵国語ということで禁止になり、国語や園芸に変更。農園で田植の実習もした。農繁期に一・二・三年生は奉仕で麦刈・馬鈴薯堀、玉葱束ねなどをした。四年生は姫路衣料廠の軍服裁縫で教室は工場に変わり、各家庭にミシンの供出を命じ、軍よりの係員はきびしく、

裁断の仕方、部分縫・縫製・仕上げの仕方などの指示。家庭科教員は助手として実習した。五年生は学徒動員で遠くの軍需工場へ出発し、厳しい指導の許に従事した。卒業式も工場で簡単にすまされたことなど、先日あった女学校時代教え子のクラス会に招かれた折にも、当時の暗黒時代の思い出を語り合っていた。

また被服教材用の糸・針等の配給を奈良まで受けに行く途中、橿原でB29に怯え森の溝の中へ姿を隠したことや、奈良の学生寮に居る娘に南瓜で作ったパンを持って面会に寄った時娘達は勤労地より荷車を引いて帰り、朝は炊豆一握りを味噌汁に入れるだけの食事だったので、パンを喜んで守衛さんも共に喜ばれた。家の防空壕には手伝人に警報が出れば子供をすぐ入れて貰うように頼み、私は夜、防空頭巾を冠り、奉安殿まで走り守衛した。戦争は厳しく沖繩は常な事件で多数の犠牲者が出たこと。B29の編隊によって東京・大阪・日本中諸都市が焼夷弾で焼かれた事（京都・奈良は特に守られていたようであった）どんなになるのかと

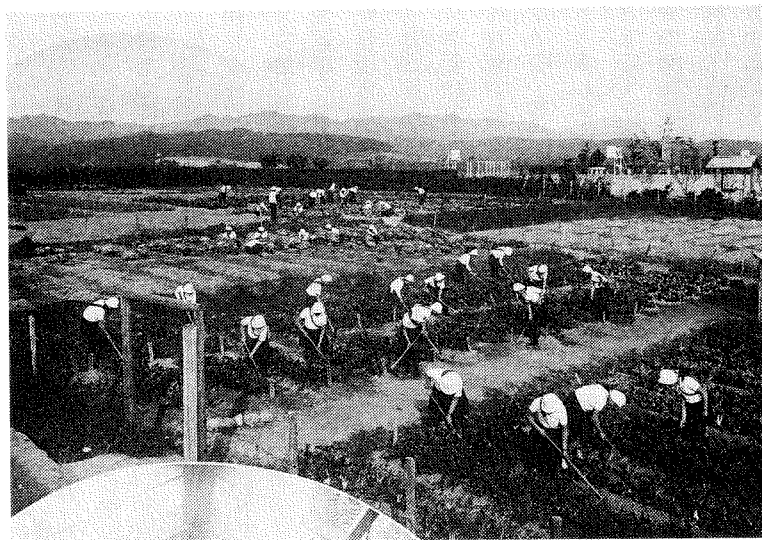
心配であった。八月六日広島に、続いて九日長崎の原爆投下で不安で堪らなかった。八月十五日正午、玉音放送で終戦を耳にし涙がこぼれて何とも言えず茫然とした。南方で妹婿、従姉の長男の戦死、姉の一人息子、従兄弟と身近かな人達の戦死を知り、国のためとは思っても遺族のことを考えると、悲しくて慰めようが無かった。

終戦後も物質不足で食品を闇市で求めたり、物々交換で大切な所持品と替えたりした。その後学制改革も行われ、世の中が大きく変化したので少しは落着き、生活もやや安定するようになった。それから七年経った昭和三十年に、京都の和裁専門学校に転勤し、二十九年間学生指導に専念した。壮年期の種々の体験を終えて、八十三歳の高齢者となった現在、朝日新聞連載中の女の太平洋戦争記事を読み、当時の悲惨な実態を種々回顧し思い出を新たにしている。また、湾岸戦争があつたりして思い出すが、どんなことがあってもあのような過ちは繰り返してはならない。いつまでも平

和であつて欲しいと念願している。

私は微力ではあるが、和裁の技術を生かし婦人部文化活動を通じて、知り合った若い人達に日本伝統の和裁技術を伝授し、後世に伝え度い気持ちで、楽しく明るい余生を送りたいと思っている。

（草内在住）



女学校の園芸の時間。当時、慢性の食糧不足から、学校の運動場等も畑にした。

京都に住んでいてよかった

西岡 春二郎 (七五)

私事になり申訳ありません。実家には、昭和九年頃、父母兄と私の四人暮らし。私の戦争始まりは、兄現役二十歳で昭和九年十一月まで満洲従軍。続いて昭和十二年十一月まで支那事変。その間に母五十二歳昭和十二年末死亡。同十六年父六十二歳死亡。あとは兄と二人暮らし。私は昭和十七年四月二十六日応召、鯖江で教育を受け、加古川市、香川県と転々し衣食住になんの心配なく一生懸命ひたすらお国のために尽くすだけでした。ところが兄は昭和十八年に嫁をもらってしばらくして昭和十九年三十才七月に第二次世界大戦に応

召された。私は昭和十八年頃から時々外泊を許され、そんな日々を三年四か月勤務し、私は親も亡く独身者であるので世帯もちの戦友より至極のんきにめぐまれた内地での戦線に参加したのでありましたが、昭和十九年頃から急に空襲が激しくなり外泊帰隊途中東和歌山市駅附近は被災地となっていた。次の外泊には大阪市内空襲のため交通が止りトラックで本部である大阪城へ寄りますと、一部がまだ燃えていた。やがて紀勢線も運転することになって汐岬によく帰隊することができた。それから終戦前のこと岬のはるか沖の方面に航空母艦できていたのか艦載機が私共の兵舎を攻撃され、また艦砲射撃に打ち込まれたが全員無事だった。夜は焼夷弾が雨のように降ってきた。終戦がもう少し延びたら上陸されていたのではないかと思う。まもなく八月十五日終戦となり、九月九日まで鉄道輸送の関係か二十五日間遅れて京都市上京区の我が家に復員することができた。兄はすでにビルマに従軍中であつた。私は少しの米と身の廻り品を持ち帰ったので

一時凌ぎはできました。その数日後近所の銭湯に行き、軍隊より払下げの作業ズボンを着用して盗すまれました。いかに綿製品に困っているかと、びっくりした。また元の就職先は平和産業で企業整備とかで軍需産業に変っていた。そのため無職が何日か続いた。その間でも戦友の先輩より空襲にやられ私の家にとめてくれんかとか、また私の衣料品はすでに食糧品に換えられていた。だが私は何とんでもこの京都が空襲からまぬがれ無事我が家があることしきみ有難いと思った。その後田辺町の知人から呼び声があつたのと食糧不足と兄の消息が全くつかめないで思い切つて昭和二十一年二月より田辺町の人となった。これでもようやく落着きを取り戻し元の汐岬当時を思い越し別れる前日に世帯もち六人はすぐに復員し、残り独身者十六人のよせ書きを依頼した名簿を作りそれにより先づ最初にK君在住の明石市を訪問する。その住所には家は無く災害地であつた人にききながらようやく着いたところがトタン張り堀建小屋内の生活だった。そ

の後K君からの便りの抜すい「汐岬時代を思い出しますと昭和二十年七月二十七日を覚えていらつしやいますか敵の艦砲射撃のあつた日です一生忘れられない日だ」T君より昭和二十二年九月五日文中抜すい「秋らしくなつて参りました夕暮迫る頃ともなれば焼跡の草むらからすきとおるような哀調を帯びた虫の声も聴かれます」……「毎日衣食住のないづくし物の高い話で人情も道徳もない世相荒れに荒れた人間共の世界……現在の東京の若い女の人を見ていると皆パンパンガールに見えて幻滅な悲哀を感じない訳には行かないこれもチヨンガールの敗惜しみか」昭和二十一年五月N君(和歌山県)「帰御後は全焼の厄い会いました田舎に引越した現在は食うか食われるかと唯食のことにのみ人間は動いているようなものですからね。食う事が出来れば一人前以上とでも申しませうか」十六名の寄せ書中I君「世の中は四尺五寸になりけり五尺のからだ置きどころなし」「T君忍び難い時に想ひ出してくれ朗らかな助平〇〇兵」以上、その後兄

は昭和十九年十月二十六日ビルマにおいて戦死。この公報同二十二年十月とどく。義姉は親元に帰り実家は絶えた。両親の死亡も早めたように思う。平和とは何んだらうか。一人一人の心の向きにより平和があるのではないだらうか。

(興戸在住)

青春のひとこま

西村 俊一 (六六)

冷雨が南天の葉をたたいている日暮の一時、窓際に立ってぼんやりと雨音を聞いていると今日までに出会い、そして別れた人達との様々な想出が走馬灯のように次から次と消えては浮び、浮んでは消えてゆく。喜びや悲しみを入れまじえて、関釜連絡船興安丸デッキに私が立っていたのは、昭和十七年も十余日たらずで終わろうとしている時であった。ドラのにぶいというか、物寂しい音にうながされて巨体が岸壁をゆっくり、ゆっくりと離れてゆく。蛍の光、見送る人、見送られる人の顔々、夫婦か兄妹かそれとも親と子か、それぞれ

れが、それぞれの思いで別れを惜み、惜まれていつまでも互に手を振り交している姿・別れとはこんなものかと今になって知る思いである。刻々と薄れゆく山脈波間に浮ぶ人の顔、父の顔、母の顔、その時ふと再度この港に帰る目があるのだらうか、そんな予感が心の隅を通りぬけてゆく。

船が外海に出るときすがに波は荒い。ピッチング・ローリングまたピッチングそのたびに私の身体は右に左にと往ったり来たりそんな時、船内放送が繰り返される。よく聞くと我々青年は非常の場合でも救命ボートの利用は出来ないのも一秒でも早くブイを身に付けて海に飛び込み船体から少しでも遠くに離れるようにせよとの指示で、それが終ると今度は乗船者全員にブイの付け方を繰返し放送している。私はこの船が無事に釜山港に入港することを祈るばかり、下関を出航して何時間くらい経過しただらうか、うつらうつらしているとボーボーと二度興安丸が汽笛を鳴らす。どうやら釜山の港に入港したようである。乗客が荷物をまとめ

て出口の方へ移動してゆく。子供の泣声、互い呼び交す声、無事に入港したので急に騒がしくなった。

そんな集団の中に私も巻き込まれ、気が付くと釜山駅のホームに立っていた。ホームには二本の国際列車が待っている。新京行と北京行で一日四列車、愛称は大陸・興亜・光・のぞみ・と覚えているが私の乗った列車の愛称名は忘れてしまっただけだ。大邱・竜山・京城・平城・安東・を通過して列車は奉天駅のホームに停る。この駅から大連・旅順方面新京牡丹江・満州里方面そして今通過して来た京城・釜山方面と私の目的地北京・山海関方面へと分岐する交通の重大要所である。その奉天駅を発車した列車は鉄道を北京へ北京へと急ぐ。錦県近くまで来ると、車窓の遙か彼方地平の果に没しようとする真赤な太陽、一度これが見たかった私。車窓からじっと見つめる大きな夕日。私の前の席にいる満鉄の社員がもうすぐ山海関に着くよ、着くと同時に税関員の車内や荷物の検査が始まる検査が終わると、その次はホームに降りて紙幣の交換もしな

ければならないが君は華北交通の社員になるのだから交換する必要はない。日本の紙幣が充分通用するし中国人から物を買う場合でも都合がよいと思うと、細かく教えてくれる。

私の勤務箇所は天津鉄路局。住所は天津特別市十三号路六経路でイタリヤ街の端にあり、万国橋も程近い阿蘇寮である。寮生は私を入れて二十一名。他に三浦寮母さんとその子供二人、雑務娘二人、軍身赴任者の寮で食堂もない。食事は天津東站前の富士寮まで出向かなければならない、まことに不便な寮である。この天津で一人だけ気楽に話し合える人がいた。その人の名は小林さん。京都市内出身で天津水路警務段に勤務していた。彼との話しはほとんど京都のことばかり。その彼とも僅か六か月で永遠の別れとなってしまった。昭和十八年の初夏、彼の勤務は天津から保定に至る白河を運行する舟団の警備で任務遂行中敵襲を受け、大陸の荒野に三十八歳で生命の灯を消されてしまったのである。京都に妻子を残したまま、その通夜も私一人、

永い一夜であった私の人生で最も永い一夜であったと思う。その時私は十八歳。

(河原在住)

「戦争に行つて死ぬのはあたりまえ」の精神はこうして培われた

林 憲 二(七〇)

小学校に行く前から口にする歌は、僕は軍人大好きよ。今に大きくなったなら、勲章つけて剣さげて、お馬に乗ってハイドウドウ」親から教えられ、あどけない子どもがみんな歌った。

子どもの頃の遊びは兵隊ごっこ、竹で鉄砲や剣をみんなで作り、木津川の川原へ行つて溝を掘ったり、木々を集めて橋をかけた。家庭での教育は、「早めし、早くそ、早風呂」で、ぐずぐずしていると兵隊に行つたから困るとたたきこまれた。

四月になつて小学校へ入学すると、桜の花の美しさ

水師營の会見は教科書のみならず、唱歌としても教えられ、旅順開城約なりて……乃木大将と会見の、所は「水師營」と大声で歌う。東郷元師も何回も習い、広瀬中佐も教材にあつた。教育勅語は暗誦し、自習時間にはこれを書いて提出したものだ。

二宮金次郎は年中教材になり、貧しい暮しに耐えて、親孝行をし、世の人々のために尽し、よく学んだ最高の手本とされた。ひたすら勤儉と忠孝を教えられ、人々は朝星夜星をいただいて働き通し、昼は梅干入りの弁当を「日の丸弁当」「国旗弁当」ともいい、これも陛下のお蔭でいただけると教えられた。生活の貧しさに対するなげきは、鍛練主義に、忠義と義理と人情、武士道の鼓吹・忠義は軍事をもって表現、国家観念を軍国主義化する。

「村のかじや」を習つては仕事に励め、「かえるとくも」では「しだれやなぎにとびつくかえる、とんではおち、おちてはとび……とうやなぎにとびついた」と精神一到何事不成を教えられる。

と、桜花はバット咲いて、バット散る、これは日本人の心を現し、戦争に行つたらお国のため、天皇陛下のためにバット散ることが大和魂と教え込まれた。

天皇陛下や皇后陛下の話を聞く時は、背筋を伸ばし、膝に両手を揃え、姿勢を正して聞き、国の父さんお母さんであり、神様のような方で直接見ると目がつぶれるほど偉い人であり、国民はすべて忠義を尽さねばならないと常に話されてきた。

小一の修身教科書には「チュウギ」の題でキグチコヘイハ、ラッパクチニアテタママシニマシタ。と壮烈な戦死を讃え、忠君愛国を教えられた。「一太郎ヤイ」の教材では、遠い山道を夜道し歩いて息子の出征を見送りに来たが、直接逢えず軍用船は出港、母は大声で「天子様のために尽せよ！」と叫ぶ声に甲板の上で鉄砲を挙げて応える姿を絵図入りで教えられた。「水兵の母」も教科書で習い、毎年の学芸会では「一太郎ヤイ」と共に行われ、見に来た父母からは大きな拍手が起つた。

旧制中学以上の学校では、軍事教練を課せられ、現役の将校が配属された。朝礼では宮城遙拝、皇太神宮遙拝を行い、校庭に天皇、皇后の写真を納めるための御真影奉安殿というお宮さんのような立派な社を建て、毎日の登下校の際には最敬礼をして拝んだ。総ての情報は検閲され、大本營の発表のみが報道された。

天皇の存在する日本は世界一良い国、強い国と教えられ、日本は戦争をすすめることによって、世界をよくし、世界の人々のために尽すのだと教え込まれた。治安警察法(明治三十三年)、治安維持法(大正十四年)、大政翼賛会(昭和十七年)等々を通じ思想統制し(子どもにはわからなかった。大部分の国民も)教育を通じ、徹底的な軍国主義を鼓吹された今になってその恐ろしさにおののく。

私も昭和十九年六月一日、三山木駅頭で、「これから天皇陛下のために忠義を尽しに行つて参ります。後に残った家族は、村長さんはじめ、在郷軍人、隣組の方々に何かとお世話になりますますがよろしくお願いします。

海行かば水漬くかばね、山行かば草むすかばね 大君の辺こそ死なめ かえりみはせじ。みなさん、お見送りありがとうございます。では行って参ります。」みんなこのような挨拶をして、国防婦人会はじめ、村人に別れを告げて、万才万才の声で故郷をあとにしたものだ。

伏見歩兵第三七部隊に入隊したが、大部分の友は帰らぬ人となってしまった。

正義のための戦争、そんなものは無い。平和、何が無くても先ず平和、平和に優る尊いものは無い。

今は亡き多くの友を偲び、その冥福と平和を祈る。

(三山木在住)

宿直室の壁に穴

安岡 小福(七)

戦中戦後を生き抜いて来た私達、校庭を畑にして大豆をまき、荒地を耕やして蕎麦を植えた。頭上すれすれに敵艦載機が大きい音を立てて飛来した。あの時は本当に怖かった。運動場の南側が氏神様、その当りを二人ずつ肥桶を運んでいたのです。その場に肥桶をおいてみんなお宮の森に小さくなり息をひそめていました。高等科の生徒や男の先生方は遠い貴谷の農場へ行ってられ、六年生の女子と私だけ、本当に心細かった。何分たったか知らない。音が止んで生き返った心地がしたものだ。

ある月曜日、出勤したら宿直室の壁に大きい穴が空いていた。敵の機銃掃射とのこと、当直の先生はさぞ怖かったことと思う。こんな田舎まで敵機が来たのです。

B 29が右へ左へと降りて来た時は頭の上に落ちるのではないかと、二歳の我が子とろろろしていた。東の方へ去って行ったので一安心して出勤した。そのB 29は木津川の草内の浜へ落ち、お茶の芽運びさんが天秤棒で追いかけられたとか聞いたが、勤めを終えてから川原まで見に行ったものです。黒こげになったB 29の残骸、落下傘で降りた米兵は憲兵に連行されたとか、右左と向きを変えたのは、着陸出来る所を探していたのだそうだ。

ささやかな抵抗、竹槍訓練、小学校の講堂には飛行機が疎開してあった。

終戦後のいつ頃だったか、環状線に乗った時一面黒こげの街が目飛び込んだ。これが大阪空襲の跡かと驚いたものだ。広島にも長崎にも行ったけど戦争は絶

対にやっではならない。人間が人間を殺戮し合うなんてこと!!

昨年は掃海艦が機雷の処理に奮闘して下さって、本当に有難うございました。

私が田辺町へ来た時は村も町も戦争一色、二人の倅せも束の間、長男出産後八月に応召五月ほどして面会の通知が来た。「この炎暑に、こんな小さい子を(生後五十日)連れて行つては駄目」という産婆さんのことは、そのとおりと子供は家に残して行つた。「大勢来なくても子供さえ連れて来たらよい。」と主人は一瞬がっかりしたようす。誰よりも子供を見なかったのでしょう。面会後私達を本願寺に残し、まっすぐ北支太原へ向かったのです。その後沖繩へ転戦しましたが、ご存知の通り取りつ取られつの激戦で戦死。実の兄もビルマ戦線で亡くなっています。身内を亡くされたお連れは沢山あった。何としても生き抜かねばとお互いに力になり合つて頑張つて来たのです。

いったいあの戦争は何だったのでしょうか。挙国一致・

聖戦ということは疑いませんでした。今日中国侵略とすることは顔を出していますが、亡くなった兵隊さん、残された私達は何と受け止めればよいのでしょうか。近隣諸国の政府や野党・マスコミに遠慮して、靖国参拝もされない総理には、齒がゆい思いがつのるばかりです。

火事場泥棒の如く敗戦実際に不可侵条約を破つて満洲に侵入し北方四島まで占領した旧ソ連は何という国でしょう。占領軍が来たら婦女子は何か……。そんな心配もなく核の傘下で復興に専念出来たことは不幸中の幸です。

そもそも人間の歴史は戦争の歴史とでもいいでしょうか。地図は何国も塗り替えられて来ました。近世では亜細亜に独立国が幾つありましたか。殆ど欧州諸国に侵略されていたのです。日本人でありながら日本を悪くいう人の愚かさは困つたもの。正しい歴史を知り、正々堂々ものをいい、国のために尽くした英霊を泣かさないようにして行きたいものです。

終戦二十五周年、昭和四十五年に府の主催で沖繩へ参りました。海が荒れているとので航路を変更、瀬戸内海を西へ進み四国と九州の間を南下したのですが、太平洋に出てからの波の静かき、英霊に守られているかのようでした。満月を仰いでの洋上慰霊祭。あの時の感激は今も忘れることは出来ません。当局の皆様本当に有難うございました。

(田辺在住)

戦争と梅

吉 本 千代子 (六三)

戦争のために切り倒さなかった。何本かの老梅が今年も花を咲かせている。

戦争と梅、なんの関係も無いように思われるでしょうが、私の生家のように、梅で生計を立てていた者には、大へなことだった。

昭和十七年頃だったと思う、梅の実が、グリーンピースぐらいの大きさになった頃。憲兵がやって来て、梅の実は、軍需品だから一つぶの実も人に売ってはいけない。あげてもいけない、全部軍に供出するように、軍から塩は何俵か送るから、その分は、梅ほしにして

出すことと、厳しいきまりを、言い渡され、それに、只のような安い値段で、村役場まで運んで行くのです。戦争もいつまで続くかわからず、こんなこと何年もしていては一家は食って行かれない、と、父は腹を立て、何十年も手塩に、かけて育てて来た梅の木を切り倒し、一面のさつま芋畑と、化してしまった。ところがその翌年終戦。泣くにも泣けず野菜物じゃなし、一年や、五年で梅は実る物じゃなし。一人息子の兄は海軍で戦死、寂しそうに芋畑に立たずんでいた今は亡き父母の姿を私は忘れることは出来ない。

(三山木在住)

学徒動員

衣 川 ツマ子 (六二)

街は車であふれ、店頭には商品があふれる昨今。使い捨て時代、乗り捨て時代だと、新しいものを買っては、次々と捨てて行く人達もいる。戦時中だった私の若い頃は、お金があっても品物が無く、食料品も配給制度だった。衣料品も一人何点と、家族の人数により配布された衣料切符の時代。でも品物は何もありません。

一番残念だったことは、家業を犠牲にしたことです。高等小学校の高等科二年の時。転校したのが枚方市の氷室小学校でした。校長先生が軍国主義のコチコチ頭

の先生で、何でもお国のためと、田舎の学校で僅か八個あったラッパも、軍隊に提供してしまうような人でした。各地区毎に男子生徒がラッパを自宅に持ち帰り、朝六時には小高い丘の上から、起床ラッパが鳴り渡り、八時五分前に集合ラッパ、集団登校もラッパに歩調を合せての毎日。都会育ちの私には物珍らしく、楽しい学校生活でしたが、二か月授業を受けただけで、六月から学徒動員として、今は津田病院のある所ですが、津田の小鹿革工場に毎日通うようになりました。ドンゴロスのような荒い織り方の、作業服を支給されて、それを着て毎朝学校に集合。先生の引率で工場に向い、夕方また学校に帰ってきて解散。あの頃「月水火水木金金」と唄にも歌われていましたが、お正月三ヶ日が休みだけで、日曜日夏休みも返上、炎暑の日も雪の日も頑張ったものです。

昭和十九年から二十年にかけてはよく雪の降った年で、底のすりへった靴を履き、何度もすべって転びながら工場に通ったことが、今もはつきり脳裡にやきつ

いています。作業は飛行機のプロペラのところにつけるパッキンを、一針一針縫いつけて作るんです。細長いアコーデオンのような筒です。どんなに頑張っても一日二個ぐらいいしか出来ません。黒い革で縫いにくいのを割り当てられたら、能率はぜんぜん上りません。若いから出来たもので、今だったら目が霞んで仕事にならないだろうと思います。お喋りしては先生に叱られました。今の中学二年生ですものね。可愛い産業戦士でした。昼食は工場から出ますが、私達農家出身では食べられません。バサバサの外米に、馬や牛の餌だった大豆や豆粕を交ぜたご飯です。各班毎にバケツにスコップを入れて計っています。びっくりしましたが、沢山の量ですものね。空の弁当箱に食器のご飯を入れ替えて、にわとりを持って帰りました。時々糠臭いクッキーのようなおやつを頂きましたが、それにもわたりの餌です。今、土筆の出る頃になると、当時お弁当のおかずは土筆を味付して、ご飯の上に乗せて持つて行ったことを思い出します。若い土筆はご飯が緑

色で、たけたのは黄色に染まっていました。私達農家のものは、主食は麦を交ぜたくらいのご飯でしたが、副食は山菜や野菜ばかり、いなごの佃煮や沢蟹をたっぷりにして食べた人もあります。今は何もかも満ち足りた生活。平和な世の中に、私は時々怖くなる時があります。何時かまた昔のような時が来はしないかと。でもお互いが自然をこわさず感謝の気持で、平和な時を楽しく過したいと願っています。

(三山木在住)

第二次大戦と私

水山 春男 (六)

私は第二次大戦の折には、最後の軍人として二十年八月八日入隊しました。この二日前には広島に原子爆弾が落され、当時の新聞では、新型のセメント爆弾が落されたが、被害は軽微である。敵も資源が少なくなつたので、このような爆弾を落したのであるというように新聞に書かれていました。

二十年の春先からは空襲が毎日のようにあり、頼みの沖縄戦にも敗れ、やがて本土に敵が上陸するであろうと、思われていた頃でありました。食べるものも充分には手に入らないようになり、戦争一色になり、農

家では十八年の春頃から米の供出がいわれだし、始めは食べる分だけを残して、余分な米は全部出していました。家が、家で食べる分をなんとかへらして、いくらかを出すように強要されましたが、当時は今のように米の収穫量も多くなく、ましてや私達の区のような山間部の農家では大変苦労したもので、このようなことから保有米を全部出してしまい、配給米をもらうということまでしてきました。幸い農家では四季折々の野菜があり、その時々の野菜が、さつま芋になり、また、馬鈴薯になったり、時には豆類になったりで、これ等のものを主食がわりに食べたもので、少量の米を入れて、大半はこれ等の野菜を入れて雑炊にして食べていたので、農家でもいろいろあって、食べることが楽な家もあったようであるが大半の人達は日々の食べ物には大変苦労をしたものであります。

私は十六年の十二月から国鉄の輸送関係の会社に勤めていたので、当時の国鉄の様子などを記してみたいと思います。十九年頃からは男子の多くは、兵隊にい

つていましたので駅長さん、助役さんを除いては大多数が女子の職員でしていました。列車の車掌さん等も次々に女子の車掌さんとなっていき、戦いがし烈になるにつれ、毎日の通勤者を除いて、乗車制限がなされるようになり、一列車に各駅何人という決定がなされていて、公用の外は何処へ行くにも大変で、切符売場の窓口で列んでいても、指定の人数になれば売場の窓口が閉ざされて、次の列車まで待たされたものです。遠くへ行く時は大変な苦勞でした。四国や九州方面へ行きたくても片町線の小さな駅では切符の割当はなく、駅から大阪市内の駅に早くから申し込んでもらって切符を手に入れたものです。また貨物も例外でなく、一般貨物は制限せられ、軍の物資が優先的に扱われ、河越荷物を送るには大変な日数がかかる有様でした。

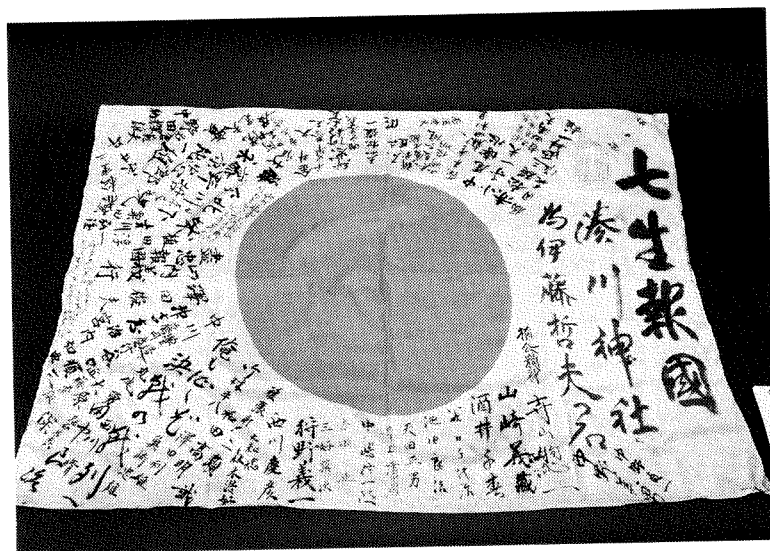
十九年から二十年にはあらゆる物資の疎開があらゆる方法で田舎に運ばれてきました。自動車は勿論のこと、牛車等もかり出され小学校の講堂や駅の近くの倉庫等に物資が搬入されていました。その頃の自動車と

いえば全部というほど木炭車で、木炭を炉の中に鉄棒で、つつき入れ、炉の下部で「ファン」を廻しながら、煙の色を見て、炉の蓋を閉じてエンジンをかけるのですが「クランク」してエンジンをかけけるには大変な力の入ることなので、多くは坂の上に止めて、準備が終り次第、坂を下り乍らエンジンを始動させていたもので、現代とくらべてみて隔世の感があります。

二十年の三月を過ぎる頃から空襲が激しくなり、大阪方面に度たびB29による爆撃を受けるようになります。片町線の京橋の附近だったろうと思いますが、列車を直撃され、車掌さんが亡くなられたが、その前日に話を交していた人だったのでよけいに思い出されます。空襲が激しくなってくるとこのようなことが度々見聞きするようになりました。今日元気で働いていても明日はどうなることやら、皆んながこのような気持ちです。ごしていただいたものです。

このような悲しい戦争の体験は私達だけで結構です。二度とこのようなことのないように祈りたい気持ちで一

(三山木在住)



日の丸の寄せ書。千人針同様、多くの人の願いがこめられていた。